

第1回

グリーン麻酔科医への道
～パスで考えた環境問題～

岡原 祥子

順天堂大学医学部附属順天堂医院 麻酔科・ペインクリニック

エコロジーとの出会い

みなさん、はじめまして。15年目の麻酔科医、岡原祥子です。私は2008年に順天堂大学医学部附属順天堂医院で臨床研修を始め、そのまま同病院の麻酔科医局に入局しました。広く手術麻酔を学んで専門医を取得した後は、産科麻酔チームに所属し、以来、産科麻酔三昧の日々を過ごしてきました。

本連載では、私がオーストラリア・パースでの臨床留学を通じて経験したことを、主に環境問題の視点からみなさんと共有したいと思っています。

途中途中で海外へ

私は生まれも育ちも東京ですが、海外在住の親戚の影響なのか、子供の幼いころから英語に興味があり、海外に憧れていました。そのため、医学部入学後、1年次と2年次の間に休学して米国のカリフォルニア大学サンディエゴ校 (UCSD) に1年間の語学留学をさせてもらいました。キャンパスで知り合った現地の大学生たちとルームシェアする機会にも恵まれ、どんな経験もすべて英語の勉強になる！とたくさん遊んで、親からしたらさぞ心配だったでしょう。当時は、医学部に合格したものの、本当に医師になるべきか迷いがあり、別の世界を見たら何か変わるかも…と淡く期待した留学でした。でもたった1年で都合よく人生が動くことはなく、帰国後は医学部に戻って卒業しました。

麻酔科入局後も、海外で仕事をしてみたいな…とうすら夢見ていたものの、最初の数年間は麻酔科医としての研鑽に明け暮れ、さらに専門医取得と前後して2度の出産をすれば、毎日の生活を回すだけで一杯いっぱい。国際学会に参加することすらなく、海外で仕事という夢はいつの間にか心の奥にしまわれていました。

しかし、産科麻酔チームで数年を過ごし、好きな産科麻酔をもっともっと知りたい！と知識欲が増す中で、海外への想いが自然に湧いてきました。日本では「特別な」医療である、産科麻酔や無痛分娩が「普通に」存在している環境に身を置きたいと思ったのです。いつか願った夢が、むくむくと意思をもって立ち上がった瞬間でした。

一念発起して英語の試験勉強を始めましたが、2021年。就職活動は手がかかり

年間、世界一周バックパッカーもしました(写真1)。夫は同じ大学の探検部の先輩(学部は別)で、それまでも一緒に合宿や旅行に行っていたからか、貧乏旅行でも不安はまったくありませんでした。17か国を巡って、日本では絶対に会うことのなかった人々と友達になり、毎日新しいことを体験した、精神的に本当に贅沢な時間でした。この時は、帰国して麻酔科医になる、という気持ちにブレはありませんでした。その理由は、貯金を使い果たしたので働く必要があった、というだけでなく、自分はどんな場所においてもこれができます！と胸を張れるスキルを早く身に付けたい、という気持ちがあったように思います。

麻酔科入局後も、海外で仕事をしてみたいな…とうすら夢見ていたものの、最初の数年間は麻酔科医としての研鑽に明け暮れ、さらに専門医取得と前後して2度の出産をすれば、毎日の生活を回すだけで一杯いっぱい。国際学会に参加することすらなく、海外で仕事という夢はいつの間にか心の奥にしまわれていました。

しかし、産科麻酔チームで数年を過ごし、好きな産科麻酔をもっともっと知りたい！と知識欲が増す中で、海外への想いが自然に湧いてきました。日本では「特別な」医療である、産科麻酔や無痛分娩が「普通に」存在している環境に身を置きたいと思ったのです。いつか願った夢が、むくむくと意思をもって立ち上がった瞬間でした。

一念発起して英語の試験勉強を始めましたが、2021年。就職活動は手がかかり



が何もなかったもので、検索エンジンに「obstetric anesthesia fellowship」と打ち込んで探し始めました。産科麻酔の臨床に携われる英語圏の病院、という条件で、シンガポール、カナダ、米国ア、オーストラリアの病院をいくつか検討し、その過程で、留学経験があったり、現地で働く日本人医師にも話を聞くことができました。書類選考や面接を経て、唯一採用してもらえたオーストラリア・パースの Fiona Stanley Hospital で、勤務を始めたのが2023年の8月でした。

気候変動、ヤバくない？

さて、こんな私がなぜ環境問題なのか。それはズバリ、日本とオーストラリアでは、気候変動に対する医療界の姿勢がまったく違ったからです。

人間が排出し続けてきた温室効果ガスが、地球の気温をどんどん上昇させていること(=気候変動)は、科学的にも証明されており、毎年最高気温を更新する夏からも自明です。産業革命前(1850～1900年)と比較して世界の平均気温上昇を1.5℃までに抑えられなかった場合、地球は未知の状態に突入し、もう元に戻ることはないと言われています。具体的には、異常気象そのものによる甚大な被害、多くの動植物の絶滅による生態系の破壊、大規模な水不足・食糧危機、そしておそらくはそれに伴う戦争や紛争など、私たちの生存環境が著しく悪化することが予想されているのです。しかし、すでに2024年の世界の平均気温は史上最高を記録し、その上昇幅は1.5℃を超えました。気温上昇は10年の平均をとるため、2024年の1年間だけで結論は出ませんが、1.5℃目標を達成するために私たちが行動できる時間は、気候時計=クライメートクロック、という概念によればもう4年を切っています。

コロナ禍にたまたま家で『Cowspiracy: サステナビリティ(持続可能性)の秘密』(2014年、Netflix)という映画を見て、環境問題を改めて自分事として考えるようになりました。この映画では、畜産業から排出される温室効果ガス

が、全世界の輸送・運送手段(飛行機、車、船など)から排出されるそれよりも多いことや、畜産業による水の大量消費・汚染、森林破壊などについて描かれています。映画内で示されるデータの数字には懐疑的な意見もあるようですが、それを差し引いても「どうしてこんな重要なことなのに知らなかったんだろう…？」とただただ驚き、肉を積極的に食べる必要はもうないな、と完全に考えが変わりました。

以降、自分でもいろいろ調べていくうちに、漁業や酪農業による環境負荷、動物の権利なども知り、ヴィーガンを目指すように。ヴィーガンは、肉、魚、乳製品、卵、はちみつといった動物由来の食べ物を食べません(食生活にとどまらず、革製品や羽毛なども使用しない、ライフスタイルそのものを指すこともあります)。ですので、肉と魚のみを避けるベジタリアンとは異なります。ただ、日本で100%ヴィーガンを実践するのはまだまだ難しいのが現状です。例えば、お出汁には魚介類がよく含まれますし、特に外食ではヴィーガンに対応する店は本当に少ないです。

一度環境問題に興味をもつと、もともとこのめり込みやすい性格もあり、消費生活における自分の選択すべてが気になってきました。中でも、大好きなファッション産業も環境負荷が非常に大きいと知った時は大きなショックを受けました。ここ数年は、古着だけを買って、すでに持っている洋服をリペアして着るように。そのほかにも、プラスチックの消費を減らすよう心がけたり、いらないものもすぐに捨てず、なるべくリユースやリサイクルに回してゴミを減らしたり、と少しずつ生活を変化させてきました(写真2)。確かに個人レベルの行動は小さくて、おそらくもうそれだけでは気候変動は解決できません。自治体や国が仕組みづくりをして行かないと厳しいと思います。でも、たくさんの人が求めれば行政も動くので、やはり自分が行動することが大切です。そして、日々の行動の一つ一つは、こんな未来になってほしい、という自分

写真2 最近はPASSTOという衣類の回収システムが気に入っています



の意思表示であり、「推せる」会社やシステムに投票するようなものだ、と私は考えるようになりました。

医師を辞めようか……

その一方、毎日手術室で大量に出るシングルユースのプラゴミを目にして、自分の心がけなんて大海の一滴、と膝がくずれるような無力感を覚えることも多くなりました。一麻酔科医の立場では何もできず、私生活とのギャップが大きすぎて、もう医師は辞めて、気候変動の解決につながる仕事に自分の時間をフルに使ったほうが良いのでは、と考えたこともあります。

ところが、留学先の Fiona Stanley Hospital の手術室では、日本では目にすることがない、あるいは考えたことすらなかったアプローチで、環境問題への取り組みがなされていました。麻酔科医の仕事と環境問題へのアプローチ、どちらかだけではなく、同時にできるんだ！という気付きは、私にとって本当に大きな希望となりました。帰国後に、医療界から気候変動に取り組む一般社団法人「みどりのドクターズ」で活動を始めたところ、LISA編集委員の水谷光先生から本連載のご縁をいただきました。

今いる場所を諦めと共にただ離れるのではなく、各人が各場所で行動を起こす必要があります。私なりの行動として本連載を始めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。